

40435

教科書文庫

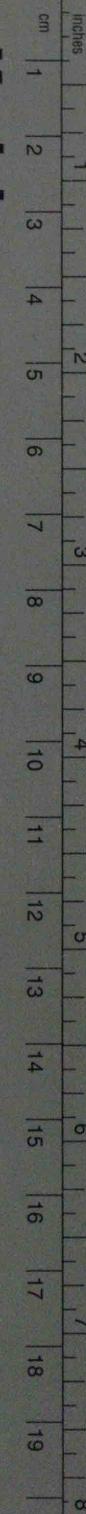
4
110
31-1930
2500027859
27859

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

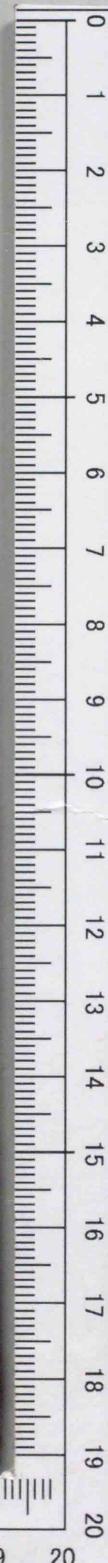
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
110
31-1930
2500027859

文部省 小學修身書 卷三 兒童用

教科書文庫

4

110

31-1930

2500027859



文 部 省

広島大学図書

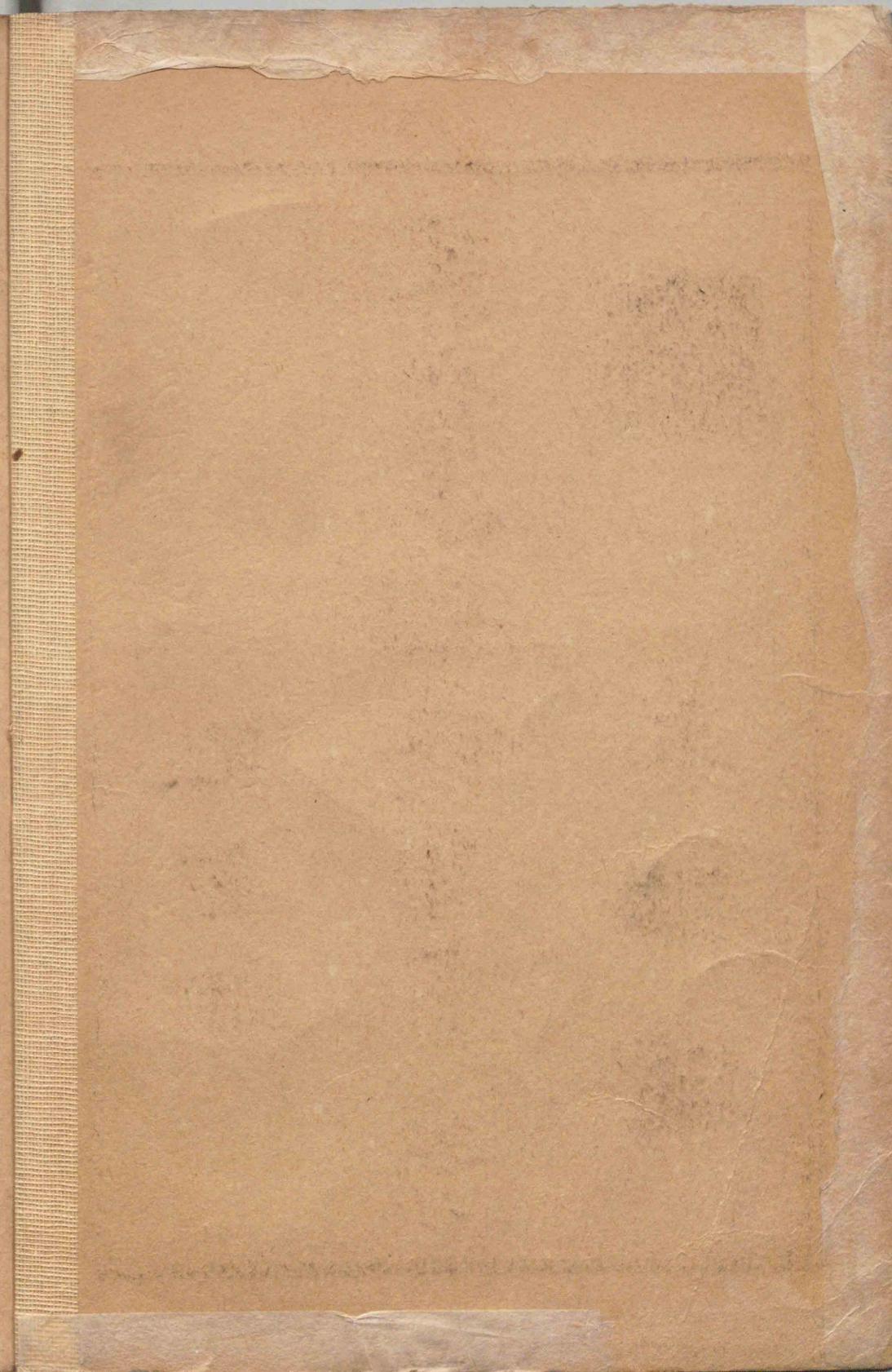
2500027859



尋常小學修身書 卷三

兒童用

登録番号	27859
分類	375.93 M



もくろく

第一	皇后陛下	くわうごうへいか	一
第二	ちゆうくんあいこく	二	二
第三	かうかう	四	四
第四	しごとにほげめ	六	六
第五	がくもん	八	八
第六	じせいとん	十	十
第七	しやうぢき	十三	十三
第八	の師をうやまへ	古	古
第九	友だち	十六	十六
第十	きそくにしたがへ	十九	十九
第十一	ぎやうぎ	二十	二十
第十二	ゆうき	二十二	二十二
第十三	かんにん	二十四	二十四
第十四	物ごとにあわてるな	二十六	二十六
第十五	くわうだいじんぐう	二十八	二十八
第十六	祝日	二十九	二十九
第十七	けんやく	三十	三十
第十八	じせん	三十三	三十三
第十九	おんをわされるな	三十六	三十六
第二十	くわんだい	三十六	三十六
第二十一	けんかう	四十	四十
第二十二	じぶんの物と人の物	四十一	四十一
第二十三	共同	四十三	四十三
第二十四	近所の人	四十六	四十六
第二十五	こうえき	四十八	四十八
第二十六	生き物をあはれめ	四十九	四十九
第二十七	よい日本人	五十三	五十三

第一 皇后陛下

くわうごうへいか

皇后陛下はお小さい時
から、きまりよくあらせ
られました。おもちひの
御しなは大せつにおと
りあつかいになり、ごじ
しんでごせいとんにな
りました。また御學問や
御うんどうなどの日々



の御きまりはたゞしくおまもりになりました。陛下はまた大そうおやさしくあらせられ、人々をおあはれみになりました。大正十二年にくわんとうに大ぢしんがあつた時ごじしんでたくさんの着物きものをおぬひになつて、こまつてゐる人たちにたまはりました。

第二　ちゆうくんあいこく

めいち十年に熊本くまもとのしろがぞくぐんにかこまれました。しろをまもつてゐた谷少將たにせうしゃうはじ

ろの中のやうすを、ゑんぱうのくわんぐんに知らせようと思ひ、そのつかひを伍長谷ごちやう村計介けいすけにいひつけました。

計介はからだにす、をぬり、やぶれたきものをきて、やみにまぎれてしろを出ました。とちゆうで





くらしにこまつて、すゑ
の子をしんるゐへあづ
けましたが、その子のこ
とをしんぱいしてまい
ばんよくねむりません
でした。金次郎は母の心
を思ひやつて、「私が一し
やうけんめいにはたら
きますから、おとうとを

二度もぞくぐんにとらへられ、いろ／＼のな
んぎな目にあひましたが、とう／＼くわんぐ
んの司令部について、しゆびよくつかひのや
くめをしとげました。

第三 かうかう

二宮金次郎は、家が大そうびんぼふであつた
ので、小さい時から、父母の手だすけをしまし
た。

金次郎が十四の時父がなくなりました。母は

つれもどして下さい」といひました。母はよろこんでそのばんすぐにしんるゐの家へ行つて、あづけた子をつれてかへり、おや子いつしよにあつまつてよろこびあひました。

孝ハ徳ノハジメ。
カウトク

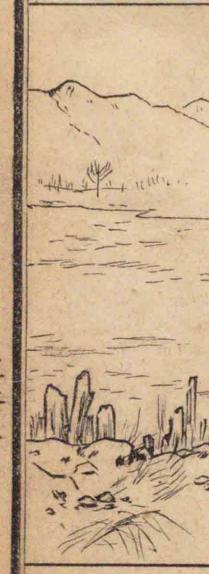
第四 しごとにはげめ

金次郎は十二の時から父にかはつて川ぶしんに出ました。しごとをすまして、家へかへると

夜おそくまでおきてゐてわらぢをつくりました。さうしてあくる朝そのわらぢをしごとばへもつて行つて、私はまだ一人前のしごとが出来ませんので、皆さまのおせわになります。これはそのお禮です。といつて



尋修三



人々におくりました。

父がなくなつてからは、朝は早くから山へ行き、しばをかり、たきゞをとつて、それをうりました。又夜はなはをなつたり、わらぢをつくつたりしてよくはたらきました。

第五　がくもん

金次郎は十六の時母をうしなひました。やがて二人のおとうとは母のさとに引取られ、金次郎はまんべゑといふをぢの家へ行つて、せ

わになりました。

金次郎はよくをぢのいひつけをまもり、一にちはたらいて、夜になると、本をよみ、字をならひ、さんじゆつのけいこをしました。をぢはあぶらがいるのをきらつて夜學をとめましたので、金次郎はじぶんであぶらなをつくり、そのたね



尋修三

を町へ持つて行つてあぶらに取りかへ、毎ばんべんきやうしました。をぢが又「本をよむよりはうちのしごとをせよ」といひましたから、金次郎は夜おそくまで家のしごとをして、そのあとでがくもんをしました。

金次郎は二十さいの時じぶんの家へかへり、せいだしてはたらいて、のちにはえらい人になりました。

第六　せいとん



本居宣長（もとすり のりなが）はたくさん
の本をもつてゐまし
たが、いちく、本ばこ
に入れてよくせいと
んしておきました。そ
れで夜はあかりをつ
けなくとも、思ふやう
にどの本でも取り出
すことが出来ました。

宣長はいつもうちの人にもかつて、どんなものでも、それをさがす時のことと思つたならば、しまふ時にきをつけなければなりません。入れる時に少しのめんだうはあつてもいりようの時には、やく出せる方がよろしい。といつてきかせました。

第七　しやうぢき

あるごふくやに、しやうぢきなでつちがありました。ある時、やくの買はうとしたんも

のにきずのあることをしらせたので、きやくは買ふのをやめてかへりました。しゆじんは大そやはらをして、すぐいでつちの父をよんで、「この子はじぶんの店ではつかへない」といひました。父



はじぶんの子のしたことはほめてよいと思ひ、つれてかへつてほかの店にほうこうさせました。この子はそののちもしやうぢきであつたので、おとなになつてからりつぱなあきんどになりました。それにひきかへて、さきのごふくやはだんくおとろへました。

第八 師をうやまへ

上杉鷹山は細井平洲をせんせいにして、がくもんをしました。ある年平洲を江戸から米澤

へまねき
ました。鷹
山はみぶん
の高い人であ
つたけれども、わざ
わざ一里あまりもむ
かへに出て、ある寺の門
前で平洲をまちうけてい
ねいにあいさつしました。それから



寺でやすまうとして、長いさか道をのぼつて
行くのに、平洲より一足もさきへ出ず、又平洲
がつまづかないやうにきをつけてあるきま
した。寺についた時も、ていねいにあんないし
て、ざしきへ通し、心をこめてもてなしました。

第九 友だち

友藏ともざくと信吉しんきちはしたしい友だちで、同じ學校を
そつげふしたのち、二人とも同じこうばにや
とはれて一しょにはたらいてゐました。

ところが信吉はあやまちがあつてひまを出
されました。友藏は友だちのために色々とあ
やまつてやりました
が、しゆじんがゆるし
ませんので、しかたが
なく、折を見てまたた
のまうと思つてゐま
した。

ある時友藏は新しい



きかいをくふうしました。しゆじんはそれを
ほめて、何でものぞみをかなへてやる」といひ
ました。友藏は「それでは信吉をもとのとほり
につかつて下さい」とねがつて、すぐゆるされ
ました。しゆじんは又「はうびに家をつくつて
やらう」といひましたら、友藏は「友だちがゆる
されました上は外にのぞみはございません。
とことわりました。それからすぐに信吉をつ
れてかへつて、二人でよろこびました。

第十 きそくに

したがへ

春日局かすがのつぼね

は時の將軍の
うばであつた人で大
そうせいりよくがご
ざいました。ある夜お
そくしろにかへつて
來た時、門がしまつて
ゐたので、ともびとが



あけさせようとしましたら、門ばんのやくに
んがきそくでございますから、上やくのゆる
しがあるまではとほすことは出来ません。と
いひました。局は「それはもつともなこと」とい
つて、さむい夜風にふかれながら門のあくまで外にまつてゐました。

第十一　ぎやうぎ

松平好房まつだいらよしよりは小さい時からぎやうぎのよい人
で、じぶんのあまに居てもかりそめにも父母

の居られる方へ足を
のばしたことはあり
ませんでした。よそへ
行くときは、そのことを
兩親りょうしんにつげ、かへつ
て來たときは、かなら
ず兩親の前へ出て、そ
の日あつたことをは
なしました。父母から物をもらふときは、てい



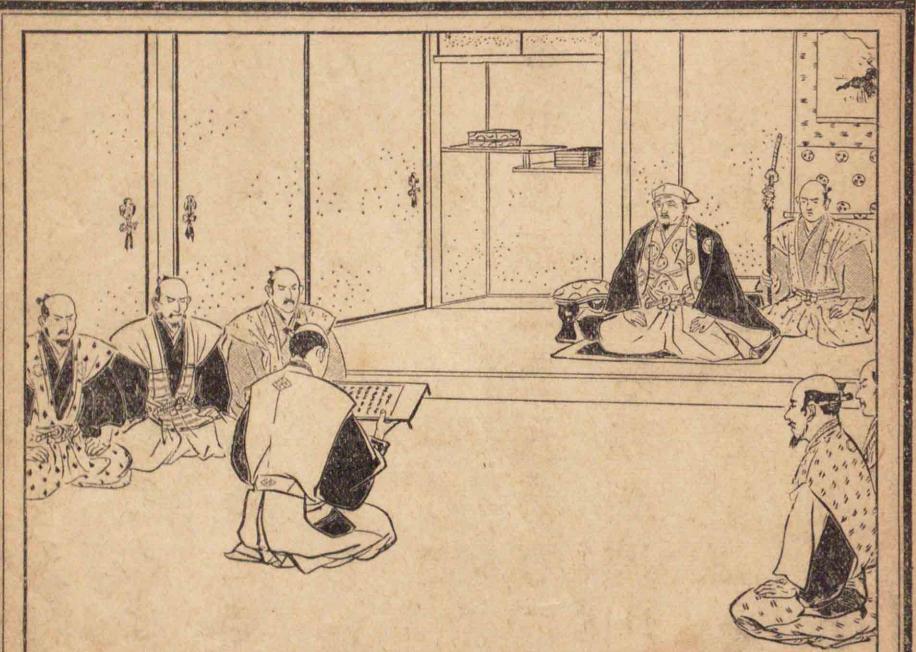
尋修三

ねいにおじぎをしてそれをうけ、いつまでも
たいせつにもつてゐました。又人が好房の父
母のはなしをすると、ぎやうぎよくゐなほつ
てきゝました。

第十二 ゆうき

木村重成は豊臣秀頼のけらいで、ゆうきのあ
る人でした。秀頼が徳川家康といくさをした
時、重成は二十さいばかりでしたが、いさまし
いはたらきをしました。又重成は家康の所へ

つかひに行きました
時、少しもおそれず、家
康の前へ出て、かきも
のをうけ取らうとし
ました。見ると家康の
けつぱんがうすかつ
たので、今一度、目の前
でして下さい」とおめ
ずおくせずいひまし



たので、家康はやむをえずあらためてけつぱんをしました。重成がかへつたあとで、家康はじめそのばにゐた人々は皆重成のりつぱなふるまひをほめました。

第十三　かんにん

重成の十二三さいのころでした、大阪のしろの中でさうぢ坊主ぼうざとたはむれてゐたら、坊主がはらを立てて重成をさんぐにのゝしつた上、うつてかゝらうとしました。その時重成

は少しも取りあはずにゐたので、見てゐた人々は重成をおくびやうものと思つてそしりました。後に徳川方とのいくさがはじまつた時、重成が外の人にもしていさましくはたらいたので、前



尋修三

にそしつた人々も、ほんたうのゆうきのある人だとかんしんしました。

ナラヌカンニン、スルガカンニン。

第十四 物ごとにあわてるな

毛利吉就もうり よしなりのおくがたがすんでゐたやしきのきんじよにくわじがありました。けらいの人人はおどろいて早くお立ちのきになるやうに。とすゝめました。その時おくがたは人々のあわてるのをとゞめ、まづめいくがたいせ

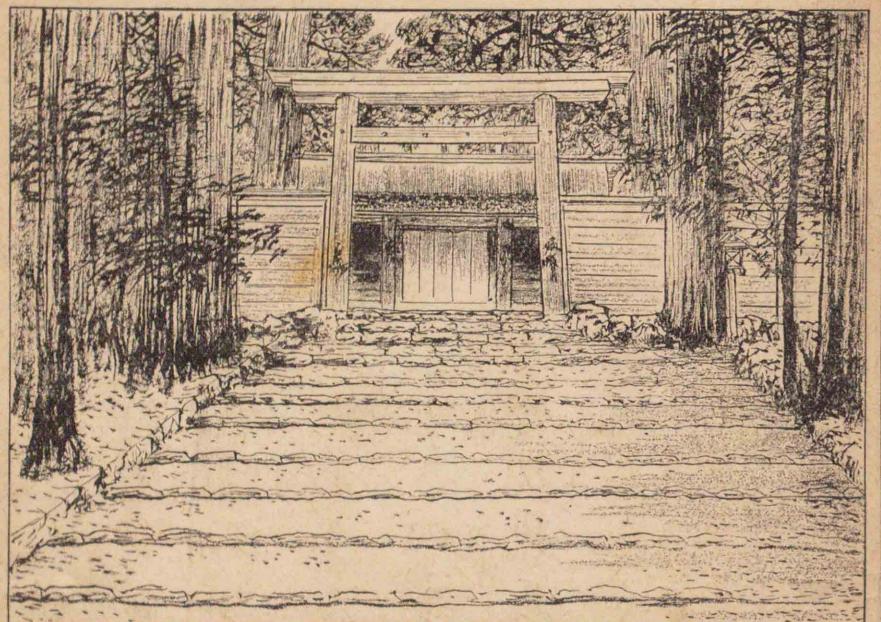
つにするものをかたづけよ。あわててこちらからも火を出すことのないやうに、火のもとにきをつけよ。立ちのく時には女こどもはじぶんといつしよに行くやうにせよ。とさ



しづをしました。人々はそのおちついたさしづにはげまされ、力を合はせて火をふせぎましたので、やしきはぶじにのこりました。

第十五　くわうだいじんぐう

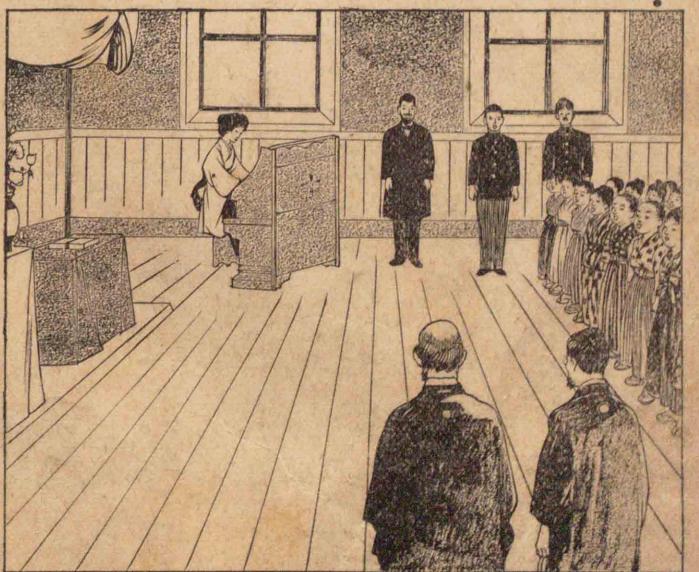
こゝに年へたすぎの木のしげりあつた中に、たつといおみやが見えます。このゑは伊勢にあるくわうだいじんぐうのおんありさまをうつしたものでございます。くわうだいじんぐうは天皇陛下のごせんぞ天照大神をおま



つりまうしてあるお
みやで、陛下にあらせ
られましてもつねに
ごたいせつにあそば
されます。われく日
本人はこのおみやを
うやまはなければな
りません。

第十六　祝日

わがくにの祝日は新年。
紀元節・天長節・明治節で
ございます。新年は年の
はじめを祝ひ、紀元節は
神武天皇がごそくゐの
禮をおこなはせられた
日を祝ひ、天長節は天皇
陛下のおうまれになつた日を祝ふのでござ
ります。又明治節は明治天皇の御恩をあふぎ、

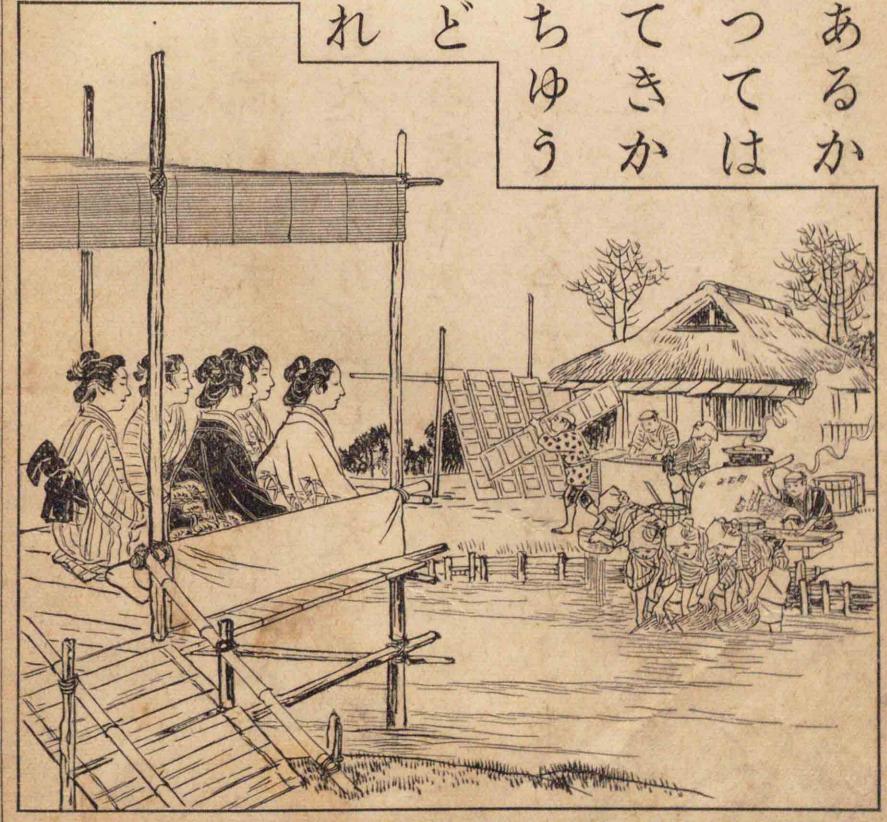


明治の御代の榮を祝ふ日でございます。

第十七 けんやく

徳川光圀とくがはみつはぢよちゆうたちが紙かみをそまつに
するのをやめさせようと思ひ、冬のさむい日
に紙すきばを見せにやりました。ちよちゆう
たちは川のうへのさじきに居て、さむい風に
ふかれながら、紙すき女めのめが水の中ではたらく
ありさまを見てかへりました。そこで光圀は
「まいの紙でも、紙すき女めのめがくらうしてこし

らへたものであるから、むだにつかつてはならぬ。といつてきかせました。ぢよちゅうたちはなるほどとさとつて、それからは紙をそまつにしないやうになりま



した。

第十八　じぜん

むかし羽前うぜんの鶴岡つるおかに鈴木すずき今右衛門いまえもんといふじせんの心の深い人がありました。大きゝんの時、田はたをはじめ家のだうぐまでうつて多くの人をたすけました。今右衛門のつまも心だてのよい人で、ほどこしをするために、着物きものるゐをうりはらいはれ着が二まいだけのこつてゐましたが、着がへがなくなつて外へ出

三十四

ることが出来なければ、くしやかんざしの入用もありません。これらの方を金にかへてもつと多くの人をたすけませう。といつて、はれ着とともにくしかんざしも皆うつてしまひました。



三十五

今右衛門ふうふに十二さいになるむすめがありました。あるさむい日同じ年ごろの女の子が物もらひに来ました。母はそれを見て、むすめに「あの子はひとへ物一まいでふるへてゐます。おまへの着てゐるわたいれを一まいやつてはどうです」といひましたら、むすめはすぐに上に着てゐる方のをぬいでやりました。

ワガミラツメツテ、人ノイタサラ知レ

尋修三

第十九　おんをわすれるな
 永田佐吉は十一の時美濃の竹鼻から尾張の名古屋へ出て、ある紙屋にほうこうしました。佐吉はしやうぢきもので、よくはたらきますから、しゆじんにかはいがられてゐました。又ひまがあるとがくもんをしてたのしんでゐました。ほうばいのものどもが佐吉をねたんで店から出してしまふやうにしゆじんにせまりました。しゆじんはぜひなく佐吉にひま

をやりました。

佐吉は家にかへつてから、なかがひなどをしてくらしを立ててゐましたが、しゆじんのおんをわすれないで、道のついでには、きつとたづねて行きました。その後紙屋はおとろへましたが、佐



吉はをりくみまつて、物をおくり、くらしの
たすけにしました。

第二十 くわんだい

かひばらえきけん
むかし貝原益軒といふ名高いがくしやがありました。ある日外に出てゐたあひだにすゐのわかものがとなりの友だちと、にはですまふをとつて、益軒がたいせつにそだててゐたぼたんの花ををりました。わかものはしんぱいして、益軒のかへりをまちうけ、となりの

しゆじんにたのんで、
あやまちをわびても
らひました。益軒は少
しもはらをたてたや
うすがなく、じぶんが
ぼたんをうゑたのは
たのしむためで、おこ
るためではない。とい
つて、そのまゝゆるし



尋修三

ました。

第二十一 けんかう

益軒は小さい時にはからだがよわかつたの

で、つねにやうじやうにきをつけました。い

ろいろの書物を読むをりに、やうじやうのことが書いてある所

があれば、書きぬいて



おいて、その通りまもりました。それでからだが次第にぢやうぶになつて、年をとつてもおとろへず、八十五さいまでもながいきをして、多くの本をあらはすことができました。

・ クスリヨリ、ヤウジヤウ。

第二十二 じぶんの物と人の物

近江の河原市といふところに一人の馬子がありました。ある日一人のひきやくを馬にのせて、あるしゆくまでおくり、家にかへつて馬

のくらをおろすと、金がたくさんにはいつて
ゐるさいふが出ました。これは
さきにのせたひきやく
のわされたものにちが
ひないと思つて、すぐ
に前のしゆくへはし
つて行つて、ひきやく
にあひ、くはしくたづ
ねた上でそのさいふ



をわたしました。ひきやくは大そう喜んで、こ
の金がなくなると、私のいのちにもかゝはる
ところでした。あなたの御おんはことばでい
ひつくすことが出来ません」といつてあつく
禮をのべ、「お禮のしるしに」と金を出しました。
しかし馬子は「あなたの物をあなたがうけ取
るのに、何でお禮などといふことがあります
う」といつて、中々うけ取りませんでした。

ある時毛利元就はその子の隆元・元春・隆景の三人に一つの書きものをわたしました。その中に「三人とも毛利の家を大せつに思ひたがひに少しても、へだて心をもつてはならぬ。隆元は二人の弟を愛し、元春・隆景はよく兄につかへよ」とありました。又隆元にべつの書きものをおたして、「あの書きものをまもりとして、家のさかえをはかれよ」とねんごろにいました。それで、兄弟いつしょに名を書きなめました。

らべた請書うけしょを父にさし出し、「三人が共同して、御いましめをまもります」とちかひました。その後隆元は早く死んで、その子の輝元が家をつぐことになりましたが、元春・隆景は



よく元就のいましめをまもり、心を合はせて
糧元をたすけたので、毛利家は長くさかえる
ことになりました。

第二十四 近所の人

相模さがみのある村に佐太郎さたろうといふ人がありまし
た。うちがまづしかつたけれども、よく近所の
人にしんせつをつくしました。ある時近所の
人の家のやねがそんじてゐるのを見て、「なぜ
なほさないのですか」とたづねたら、その人が

「びんぼふでなほす
ことが出来ません。」

と答へました。そこ

で佐太郎は村中の
家からわらを少し
づつもらひあつめ、じ
ぶんも出して、そのやね
をなほさせました。又村
の中にくわじにあつた



尋修三

人があると、じぶんのやぶの竹をきつて、その
におくりなどしました。

第二十五 こうえき

佐太郎のすんでゐた村のわうらいの土橋は度々そんじて、人々がなんぎをしました。佐太郎は村役人となつた時、役人なかまとさうだんをして、めいくのきふれうを少しづつたくはへておいて、その金で石橋にかけかへました。それからはながく橋のそんじることが



第二十六 生き物をあはれめ

なくなつて、大そうべんりになりました。その外にも、佐太郎はいろいろと村のためになることをしたので、人々にたつとばれ、村役人のかしらに立てられました。

むかし木曽山
中に孫兵衛といふ馬子がありました。ある時一人の僧が

その馬にのりました。道のわるいところにかかると、孫兵衛は

「親方あぶない、あぶない」と



いつて馬をたすけてやりました。僧はふしげに思つて、そのわけをたづねましたたら、孫兵衛は「私ども親子四人はこの馬のおかげでくらしてをりますから、親方と思つていたはるのござります」と答へました。やがてあるしゆくへついて、僧はちんせんをわたしますと、孫兵衛は、その中で餅もちを買って馬にたべさせました。それからじぶんの家の前へ行くと、孫兵衛のつまがすぐに出て来て馬にまぐさをや

つていたはりました。僧はそれを見て孫兵衛
ふうふの心がけのよいのに深くかんしんし
ました。

第二十七 よい日本人

よい日本人となるには、つねに天皇陛下・皇后
陛下の御徳をあふぎ、又つねに皇大神宮をう
やまつて、ちゅうくんあいこくの心をおこさ
なければなりません。

父母に孝行からうからうをつくし、師をうやまひ、友だちに

はしんせつにし、近所の人にはよくつきあは
なければなりません。

しやうぢきで、くわんだいで、じぜんの心も深
く、人からうけたおんをわすれず、人と共同し
てたすけあひ、きそくにはしたがひ、じぶんの
物と人の物とのわかつをつけ、又せけんのた
めにこうえきをはからなければなりません。
その外ぎやうぎをよくし、物をせいとんし、し
ごとにほねをり、がくもんにはげみ、からだの

けんかうにきをつけ、ゆうきをやしない、かんにんの心つよく、物にあわてないやうにし、又けんやくの心がけがなければなりません。かやうにじぶんのおこなひをつゝしんで、よく人にまじはり、よのため人のためにつくすやうに心がけるのは、よい日本人になるに大切なことです。さうしてこれらの心えはまごころからおこなはなければなりません。

をはり

尋修三

著作権所有
發著作兼
文 部 省

昭和五年十一月五日翻刻印刷

昭和五年十二月二十日翻刻發行

尋常小學修身書卷三兒童用

定 價 金 七 錢

は

兼翻刻發行
兼印刷者
代表者

石川

正作

印 刷 所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

東京書籍株式會社工場

日六月一十年五和昭
濟查檢省部文

發行所

東京書籍株式會社

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地

尋三

土井秋枝

広島大学図書

2500027859

